

ビルマ(ミャンマー)という国

昨年5月大型サイクロンに襲われ、死者、行方不明者7万人、罹災者は実に150万人とも言われ、世界中の同情を誘ったビルマも今ではまったく世界の動きの蚊帳の外にある。

ビルマの正式名称(英語訳)は、「ミャンマー連邦」で、かつて「ビルマ連邦社会主義共和国」と長たらしい名で呼ばれていたのに比べて、随分あっさりしたものになった。

ところが、この国の政治構造は複雑で国際的な常識や社会通念からみても、極めて異質で軍部が独裁的に統治して、その強権的な手法が多く、多くの苦難や不幸を国民に押しつけている。国際人道機関などから再三警告を受けているのはすでに周知の事実である。

現軍事体制がいつまで続くのか予測はできないが、日本とは大東亜戦争を通してつながりの深い国でありながら、近年は正しいニュースが伝えられず、残念なことに今日この国は世界の人々から乖離され酷く誤解されてしまっている。多少なりともその誤解を紐解くエピソードを紹介することによって、本当のビルマの良さを分って欲しいというのが、ビルマの隅々まで歩き、政府高官からシャン族の長老とも交流を持ったひとりのビルキチ(「ビルマ気狂い」の意、古山高麗蔵、会田雄次もそのひとり)としての願いである。

ビルマ人の人間的特性を二つほど紹介しよう。そのひとつは、ビルマ人が信仰心に篤く、底抜けに人が好いことである。いつもニコニコして人懐こく誠実、控え目で友情に篤く礼儀正しいことである。家族仲良く、隣人とも親しく宥和を図る。だから、お互いが助け合い家族の絆や友情はいつまでも切れることがない。戦時中日本兵との間に子をなした女性が、戦後もずっとその兵士を慕って待ち続け、生涯独身を通す健気さには頭が下がる。

もうひとつは、耐えて我慢強いことである。あのサイクロン時の悲惨な状況下で、軍政府役人のごまかし、援助物資隠匿、横流しのような悪徳にも関わらず、ひたすら黙って耐え続ける崇高な人間性は、「人格」というものの意味を改めて問い直したくなるほどである。だから、今でも激しいデモや暴動が彼らの自発的な意思から起きたとはとても信じられない。この類稀な高潔な国民性が反って悪名高い軍政をのさばらせている原因かも知れない。

ともあれ、ビルマで悪いのはほんの一握りの軍の為政者だけであって、国民の99%は善人で、一度訪れたらビルマに嵌り、あなたもビルキチになることは間違いない。(近藤)